

第二次世界大戦期における 『主婦之友』と『少女倶楽部』の女性像 ——消えた「女性研究者」を中心に——

武内治子

1. 序論

本論文では、第二次世界大戦期の日本において女性がどのように表象されていたのか、女性雑誌『主婦之友』と少女雑誌『少女倶楽部』の表紙を取り上げ、プロパガンダとしての女性表象の役割を検証していく。

若桑みどりは『戦争が作る女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』の中で、女性雑誌の表紙と口絵を検証し、「国民全般の信条に訴え、心から敵を憎悪する心情を生まれさせ、国家に身を捧げようという心情を呼び起こすためには、もっとも効果的なメディアは純粋芸術ではなくマスメディアである」⁽¹⁾と述べており、タブローが戦争教化として果たす社会的役割は実際それほど大きくはなく、影響力で言えば、新聞や雑誌など日常生活の中で、どこにでも目にするマスメディアの方が絶大だったと摘している。そして、雑誌の表紙は、雑誌の中の記事よりも今注目すべき事柄を即座に訴えかけやすく、読者に強烈なイメージを与えられる要素を持っている。従って本論文では、女性雑誌の表紙を検証することで、社会の動向に合わせて女性に求められた役割を浮き彫りにする。

女性雑誌『主婦之友』は、1917(大正6)年の創刊から2008(平成20)年の休刊に至るまで、長年女性雑誌を牽引してきたメディアである。『主婦之友』は、都市に住む核家族という新しい家族の形態に属する新妻、若しくは花嫁修業中の女性に読者を限定し、女性が結婚した後の家事や育児、料理についての教本となることを目指して作られた。1943(昭和18)年には163万部を超え、同じ時期に発行していた雑誌『婦

人倶楽部』は40万部であったことから、『主婦之友』が婦人雑誌のトップに君臨していたことが分かる⁽²⁾。

それに対して『少女倶楽部』は、主に5・6年生を読者層としており、道徳的な教養を説き、将来良妻賢母となる性質を育むことを目指した雑誌である。『少女倶楽部』のスローガンは「右手に教科書、左手に少女倶楽部」であり、教科書と並行して、少女にとって重要な教本となることを目標としていた。

両誌の読者層には「都市に住む中間層」という共通点があり、言わば『主婦之友』を読む新妻から生まれた子供たちが『少女倶楽部』を読んでいると言える。都市部の中間層を対象とした『主婦之友』の読者である母親の愛情と教育のもとで育つ少女たちは次世代の母親予備軍でもある。

まず、若桑みどりによる『主婦之友』の表象分析を見てみよう。若桑は、表紙と口絵を調査対象とし、そこに表れる女性像を、「母子像」、「看護婦像」、「銃後の女性像」の3つのパターンに区分した。「母子像」では、小さな子供を産み育て、やがて戦地へと送る軍国の母像が推奨される。「看護婦像」では、看護婦の隣には負傷した兵士が描かれることが多く、兵士にそっと寄り添いながら介護をする姿が強調され、兵士にとっての癒しの存在として描かれる。「銃後の女性像」は1941（昭和16）年に国民勤労報告協力令が公布された以後から頻繁に表紙に登場し、この表象からは笑顔が消え、何をしているのか分かるように上半身まで描かれるのが特徴である。

『少女倶楽部』の少女像も主に3つのパターンに区分される。中川裕美著『少女雑誌に見る「少女像」の変換——マンガは「少女」をどのように描いたのか——』によると、1つ目は年下の男児を世話するか、小動物を世話する形で描かれる「小さなお母さんとしての少女像」、2つ目は健康な身体を作り将来元気な赤ちゃんを産めるようにと「運動する少女像」が描かれ、3つ目は『主婦之友』と同じように「銃後の少女像」に分けられる⁽³⁾。

以上のように、女性雑誌の表象については女性像、少女像ともに先行研究で指摘されてきたパターンが存在している。

しかし、筆者が1937（昭和12）年から1945（昭和20）年までの同雑誌の表象を網羅し検証した結果、この表象区分に当てはまらない女性像や少女像が登場し、消えていっ

たことが明らかになった。したがって本発表では、この2世代の女性像を再度検証することによって、先行研究では言及されてこなかったより複雑な戦中の女性に課せられた役割を浮き彫りにしていく。

2. 新しい女性像としての「女性研究者（栄養士）」

1942（昭和17）年3月号に「女性研究者（栄養士）」が初めて表紙に登場する。残念ながら女性研究者の表象が表紙に採用されたのはこの一例のみである。彼女は『主婦之友』の多くが日本髪を結っていたのに対して、少しおっぱで女学生の面影を漂わせる趣がある。この女性研究者が描かれた背景には、科学技術者の需要急増と、男性研究者の不足を補うために、文部省が女性の理科系専門学校の設置を要請したことが要因として挙げられる。女性研究者が描かれる前年の1941（昭和16）年に、初めての理科系専門学校となる帝国女子理学専門学校（現・東邦大学）が設立された。この時期の授業風景を見ると、女生徒たちは皆おっぱで白衣を着ており、主婦之友の表紙を飾った女性研究者とよく似ている。理科系の大学・専門学校の新設は1943（昭和18）年を機に増加していくが、注目すべきは東京を中心に新設されたわけではなく、全国各地で女性研究者の育成・推奨が行われたことである。同年3月8日の朝日新聞には、『理科系に女性の進出 目立つ専門学校の申し込み』という記事が掲載されている。そこには女子の理科系専門学校の入学に志願者が殺到し昨年に比べて4割増加したという記述がある。各専門学校の定員数と志願者数を見てみると、東京女子医専が定員数150名に対し、志願者数650名（倍率4.33）、帝国女子医学薬学専門学校医学部は定員数150名に対し志願者数880名（倍率5.86）、女子歯科医専は定員数150名に対し志願者数293名（倍率1.95）、共立女子薬専は定員数120名に対し、志願者数700名（倍率5.83）、東京女高師理科は定員数30名に対し志願者203名（倍率6.76）となっている⁽⁴⁾。どれも高い倍率となり、理科系専門学校の人気が伺える。

そして、女子の科学系の学部が人気を博したと同時に、女性研究者の活躍の様子も新聞記事で確認できる。1943（昭和18）年3月25日の朝日新聞では、「科学戦線に咲く女子三銃士」と題して、油田調査で南方へ行く3人の女性研究者が掲載されている⁽⁵⁾。

彼女たちは文部省資源科学研究所の職員で、戦死した上司の意志を受け継ぎ、油田調査の科学的な方法を研究し、3人揃って近く南方へ赴くという記事とともに、顕微鏡の前で仕事に取り組む3人の写真が大きく掲載された。このように、科学を学ぶ女性たちが最先端の研究をして、国のために働く姿を、「女性三銃士」の物語としてややドラマチックに取り上げた。

以上のことから、1941（昭和16）年の理科系専門学校の設立を皮切りに、科学への意識が男性だけではなく、女性にも広がった様子が当時の新聞記事から伺える。こうした中で、科学が家庭にも浸透し始めていく。

女性研究者が表紙を飾ったこの号には、読者の体験談として病弱な子供を丈夫にした育児方法の特集が組まれており、例えば、小児結核の子を食育で健康児にしたというような記事が掲載されている。この体験談には総評が掲載されており、次のように述べられている。

お母さんの持つ科学性に敬意を表したいと思います。（中略）愛に溺れぬ科学性を持っており、一般のお母様のご参考になるところが多いと信じます⁽⁶⁾。

この総評では、体が弱い子供を心配する余りに根拠のない治療を母親が施すとかえって症状を悪化させてしまう事態になることを指摘している。母親の最も重要な役割は、健康な子供を産み育てやがて兵士として戦地へ送り出すことであった。健康な子供を育て上げるためには栄養価の高い食事、運動など専門的な知識を要するため、母親にも科学的知識を持たせることを推奨した。

女性研究者の表象は、一見すると女性の社会進出を反映した新たな女性像と捉えられるが、科学的知識を育児に取り入れた新たな母親像という二重のイメージを孕んでいる。新妻や花嫁修業をする若い女性をターゲットとしていた『主婦之友』に女性研究者の表象が突如出現した理由には、家庭にも科学の力を養っていかこうとする動きが見え隠れしている。

同時期の1942（昭和17）年4月号『少女倶楽部』においても、理科室で実験に取り組む少女像が表紙を飾っている。実験室において、セーラー服を着たおかつぱ頭の少

女が、真剣な手つきで慎重にピーカーから試験管に薬品を移している情景が描かれている。机の上には様々な実験器具が置かれ、『主婦之友』の「女性研究者（栄養士）」の表紙と比べても、周りに置かれた容器の専門性は負けてはいない。表紙には「科学でも示せ 日本の力」という文字も確認できる。この号には、『全日本少国民発明工夫製作品大募集』の公募が掲載されている。

『全日本少国民発明工夫製作品大募集』は1941（昭和16）年から終戦まで継続して毎年開催された公募である。審査員の中には、女性研究者の先駆けとして知られる黒田チカ（東京女子高等師範学校教授理学博士）の名前も確認できる。この公募では、豪華な懸賞金が贈られた。文部大臣賞（9名）には、入選者には高級顕微鏡（倍率300倍）と記念章、入選者の学校には科学教育振興資金千円、特等賞（10名）には、入選者に望遠鏡と入選者の学校には表彰状と科学教育振興資金二百円が贈られている。これらの懸賞金から、個人の公募というよりも、学校全体を巻き込んだの公募だったことが分かる。

また、この公募は『少女倶楽部』『少年倶楽部』『幼年倶楽部』の合同企画でかなり大々的なものであり、公募受賞者は合計で1169名にも上り、文部大臣賞には女子1名も選ばれている⁽⁷⁾。入選・入賞した作品は『全日本少国民発明工夫展覧会』として、東京都日本橋・三越にて開催された後、京都等へ全国巡回展が組まれた。このように、雑誌の域を越えて、公募展を行い、子供たちの発明品を展示し、科学の力を養う取り組みが行われていた。

1940（昭和15）年10月の朝日新聞夕刊では、すでに母と子の科学教育についての座談会特集が組まれており、教育関係の研究者らが一般国民の科学の知識が欧米よりも遥かに劣っている現状を危惧し、家庭生活の中から科学を身に着けさせようという意見が交わされている⁽⁸⁾。それを証明するかのように、『少女倶楽部』に掲載された受賞作品を見ると、「透明紙やすりの開発」や「傘立ての改良」、「改良リヤカー」など子供たちにとって身近である学校や家庭で使う道具の発明が目立っている。このように、日常生活の中で科学や発明に興味を持たせる教育が雑誌や学校ともに行われていた。

3. 科学と少女の関係 ——「少女と飛行機」の表象分析

日常生活から生み出された科学や発明への興味を発展させ、やがて子供たちを戦争協力に誘導しようとも生まれた表象が「少女と飛行機」をテーマにしたものだと考える。1938（昭和13）年の10月号では、青空の下、飛行機のおもちゃを飛ばそうとする姉弟の姿が描かれる。

男の子の表情は真剣そのものだが、それに対して姉である少女は生き生きと笑顔を浮かべ空を指さしている。日の丸のおもちゃの飛行機は、将来この男の子が飛行機に乗って戦地へ行くことを示唆している。この男の子の運命を誘導するのが、勇敢な母親であるというように、少女の表情は迷いがなく希望さえ感じさせる。

1942（昭和17）年の10月号の表紙はグライダーを運転する少女である。この少女は男性のように勇ましく片方の右足を機体に乗せて動かそうとしている。表情はやはり笑顔で恐怖心は感じられない。

この号の表紙を飾った年の9月には軍の方針が、航空力増強に重点を置いたため、飛行機の生産や整備に関わる仕事が増えた社会的な背景がある。1941（昭和16）年『少女倶楽部』10月号に、少女と模型飛行機という特集が組まれている。そこには何故、少女に飛行機の知識が必要なのかが述べられている。

第一に、少女たちは、大きくなって、やがてお母さんになる人たちだ、ということです。

第二に、飛行機なしでは国を守ることがとても出来ない。飛行機はお手玉やお人形と違って直接国を守るのに役に立つものだということです。

第三に、飛行機ばかり沢山あっても、これに乗る人たちがなければ、飛行機は、国を守る力となることはとても出来ない、ということなのです⁽⁹⁾。

将来少女がお母さんとなった時のために息子が操縦する飛行機がどれだけ性能が良く目的地まで安全に飛行できるかを科学的知識があれば理解が出来、飛行機は怖いも

のであるという不安が払拭されるということを説いている。自ら作った飛行機で、将来自分の息子を送りだせというメッセージが少女と飛行機の組み合わせには込められているのである。

4. 兵士と少女の関係 ——アイドル的要素を持つ少女像

『少女倶楽部』では、もう一つ、これまで指摘されていなかった「アイドル的な要素を持つ少女像」がいる。少女と慰問袋という主題は度々描かれており、そこには兵士の姿は描かれていないが、兵士と少女の繋がりが浮かび上がる。慰問袋と少女の関係性について、中川の研究によれば、慰問袋は戦争の象徴的な記号であり、それが少女の可愛らしい容姿と合わさることで実態としての戦争を見えなくさせ、少女の清らかさだけを前面に出す効果があるとされている⁽¹⁰⁾。これは、戦争の記号である慰安袋や日の丸といったものが、少女と対で描かれることにより戦意高揚を掲げるのではなく、兵士にとって癒しの対象としての少女像が存在していたという事である。慰問袋を開けて、少女が作った慰問人形を嬉しそうに持つ戦地にいる兵士の姿が1940（昭和15）年7月号『少年倶楽部』の表紙に掲載されている。彼らは異国の地で少女からもらった慰問人形をお守りにし、戦った。このように先行研究では少女は癒しの対象であり、兵士にとってはあくまで妹的な存在であることが前提とされてきた。

しかし、1937（昭和12）年秋の増刊号の表紙を見てみると、これまでの『少女倶楽部』の少女像よりも年上の女性が登場する。彼女は読者をまっすぐ見つめて口元は口角を上げて歯を見せてにっこりと笑っており、慰問袋を指先で持つその仕草は艶っぽく、明らかに少女の仕草ではない。そして、この女性の容姿は美人であることも大きな違いである。この視線はどこに向けられているのだろうか。この頃、少年・少女雑誌や女性雑誌を兵士への励ましの読み物として慰問袋に入れることを推奨されていた。そのため、描かれたこの女性は慰問袋に『少女倶楽部』を入れようとしている。この女性は明らかに、この号を手にするであろう兵士のために描かれている。戦地でこの表紙を見た兵士は、幼い妹の様な少女としてよりも、アイドルの様な、理想の恋人とし

て見たのではないだろうか。戦中、少女雑誌の少女像は読者である少女のためだけではなく、兵士のことも意識して描かれたという稀有な表象である。

この表象が表れた1年後に戦地の兵士が読む雑誌『戦線文庫』が創刊された。この雑誌は、国民の慰問金から拠出され、軍部が監修し一括買い上げとした陸軍慰問雑誌である。敗戦までの7年間毎月途切れることなく発行され、最後まで表紙はカラー刷りで、頁数も200頁前後を維持し続けた。1938（昭和13）年11月の『戦線文庫』の表紙でも慰問袋を持つ女性が登場している。男性雑誌でありながら、表紙は女性雑誌とほぼ変わらず、女性が描かれることが多い。戦線文庫には、毎号グラビア特集があり、原節子や田中絹代といった女優や歌手が誌面を飾っていた。また、彼女たちが書いた兵士宛の慰問文も掲載されている。これらのグラビアは戦地を生き抜く兵士たちにとっての癒しとなり、生きる活力を与えていた。『少女倶楽部』に現れたアイドル的要素をもつ少女像は、戦線文庫の表紙やグラビア写真と同じ要素があったと言える。

5. 終わりに

以上のように、先行研究で指摘されてきた表象に当てはまらず、また、パターン化されずに消えていった表象の一例を考察した。特に、女性と科学の関係は重要な事項であると考えられる。男性の代替としての女性研究者の需要が高まったことで、専門学校や学部の新設が相次いだ1942（昭和17）年という時期に、若い主婦層をターゲットとした『主婦之友』に女性研究者としての栄養士が描かれたことは、一見すると女性の社会進出の支持と取れる。しかし、『主婦之友』の特集記事が、「子供を丈夫に育てるために、母親は愛情よりも栄養学などの知識を持って育てること」を推奨していることから、女性研究者の表象には、男性の代替としての女性研究者を推奨する側面と、母親に対して栄養学を身に着けた子育てをするように推奨する側面の両方があるものと考えられる。その後、女性研究者や理科の実験をする少女の表象に取って代わって増えていくのが、飛行機などを製造する銃後の女性像である。戦局が悪化する中で、長期的な子育ての知識よりも、急を要する飛行機や機械を生産する知識と労働が女性に求められていった。

また、『少女倶楽部』に登場する稀有な表象の例として、アイドル的要素を持つ少女像について指摘した。当時の女性に求められたものは、先行研究で指摘されてきたように、大別すれば男性の労働力の代替としての銃後の役割、子を産み殖やす役割、そして兵士を癒す役割となるが、本発表が着目した事例は、少女期を含めた女性に対するプロパガンダが、当時の女性をめぐる状況と結びつき、より複雑なレトリックを持っていたことを示している。これら女性雑誌の表紙は、当時の新聞、雑誌記事の記述やグラビア写真の中の女性像と関連しながら、戦局に求められる女性の役割を読者に直接訴えかける機能を十分に果たしていたのである。

註

- (1) 若桑みどり『戦争が作る女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房、1995年、123頁。
- (2) 若桑みどり、前掲書、145頁。
- (3) 中川裕美『少女雑誌に見る「少女」像の変換——マンガは「少女」をどのように描いたのか——』出版メディアパル、2013年、87頁。中川は、他に、国家を象徴する少女として「豊穡と少女」、「伝統と少女」を取り上げている。畑に実る収穫物と少女の組み合わせは、生命の力強さを表し、生命が持つ生と死の循環=永遠を象徴する。伝統と少女においては、古武術、古典芸能、神域という日本古来の伝統を行う少女として描かれ、そこでは少女の清らかさ、即ち処女性が強調されている。
- (4) 「理科系に女性の進出目立つ専門校の申し込み増加」朝日新聞、1943年3月8日。
- (5) 「科学戦線に咲く女子三銃士 南の油田へ挺身」朝日新聞、1943年3月25日。
- (6) 齋藤文雄「弱い子を丈夫にした育児の苦心」『主婦之友』1942年3月号、147頁。
- (7) 「第二回全日本少国民発明工夫製作品大募集」『少女倶楽部』1942年4月号、102頁。
- (8) 「母と子の科学教育座談会」朝日新聞、1940年10月4日。
- (9) 北村小松「特集 少女と模型飛行機」『少女倶楽部』1941年10月号、98頁。
- (10) 中川裕美、前掲書、92頁。